### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安食正夫著『產業社會學』
Sub Title	M. Ajiki : Industrial sociology
Author	十時, 嚴周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1957
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.30, No.6 (1957. 6) ,p.76- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19570615-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

又は訴えらるべきその他の場合に分けて説明する。

「既判力の及ぶ場合、②總有の訴及び複數の者が共同して訴えた。であるとした各場合を再検討している。例えば破産債権者の債権を争う複數の者に對する確認訴訟は、從來訴訟物の同一なるが故に必要的共同訴訟であるとした各場合を再検討している。例えば破産債権者の債権を争らるべきであるとしている。例最後に必要的共同訴訟であるとして必要説判例が訴訟物の同一性を以て必要的共同訴訟でであるから、それのみから必要的共同訴訟にはならないとする。

「以訴えらるべきその他の場合に分けて説明する。

は必要的である」と結んでいる。場合、又は他の訴訟に對し旣判力の延長がありうる場合、共同訴訟し、「複數の共同訴訟人が 共同してのみ 訴を提起し又は訴えられる最後に以上論じた處を必要的共同訴訟の要件を定める規定に構成

# 12 破産管財人の人的責任 Friedrich Weber

責任を否認する傾向、更に以上の諸見解を調整する契機としての分の注意をしたか否かに係るとする Köin 高裁の見解、更に人的方の注意をしたか否かに係るとする Köin 高裁の見解、要に人的方の注意をしたか否かに係るとする Köin 高裁がびに Jaffa の見解に對し、破壺財團が訴訟費用を塡補するに充分ではなくても訴訟を中止する義務はないとする多くの高裁のに充分ではなくても訴訟を中止する義務はないとする多くの高裁のに充分ではなくても訴訟を中止する義務はないとする多くの高裁のに充分ではなくても訴訟を中止する義務はないとするとなくの高裁の注意をしたか否かに係るとする Köin 高裁の見解、更に人的責任を負うか否かが、本論文のテーない訴訟追行費用につき、人的責任を負うか否かが、本論文のテーない訴訟追行費用につき、人的責任を負うか否かが、本論文のテーない。

點につき必要な注意を拂わないその義務違反は人的責任を生じる、身の結論は、管財人には訴訟の見透しを調査する義務があり、この(Haftung)を制限する ことにより 解決しようとする Rieger の債權者に 對する 責任の 矛盾を 重大な 過失という 點に 客觀的 責任債權者に 對する 責任の 矛盾を 重大な 過失という 點に 客觀的 責任

(石川 明)

ということである。

## 安食正夫著

# 『產業社會學』

### Ι

實證」と附記される理由もここにあり、これ迄のいわゆる「產業社間層」を取上げている。從つて、本書の副題に「社會體制の理論と物には、主としてサラリーマンとかホワイトカラーと呼ばれる「中象には、主としてサラリーマンとかホワイトカラーと呼ばれる「中象には、主としてサラリーマンとかホワイトカラーと呼ばれる「中象には、主としてサラリーマンとかホワイトカラーと呼ばれる「中の「社會體制の理論」を展開しようとしたものであり、その研究對の「社會體制の理論」を取上げている。從つて、本書の副題に「社會體制の理論と解する。

を異にしているものといえよう。會學」とは、およそその趣き會學」とか「産業における人間關係の科學」とは、およそその趣き

造に若干の疑問がないわけではない。

造に若干の疑問がないわけではない。それだけに、本書におけるの典型的なタイプが考えられる。その點、本書は、その傾向からしの典型的なタイプが考えられる。その點、本書は、その傾向からしの典型的なタイプが考えられる。その點、本書は、その傾向からしの典型的なタイプが考えられる。その點、本書は、その傾向からしの典型的な別である。その點、本書は、外國の諸原典を出り、一般立即しな出り、一般立即とないの。

は、 な論爭點にも、若干ふれるところがあると考えられるからに外ならい。というのは、そうすることによつて、目下の理論社會學の重要が、後篇には十章にわたる著者のこれ迄の實證的諸研究が集錄さ二篇にわかれ、前篇には臼集團構造、臼成層構造、闫社會體制の三二篇にわかれ、前篇には臼集團構造、臼成層構造、闫社會體制の三二篇にわかれ、前篇には臼集團構造、臼成層構造、闫社會體制の三二篇にわかれ、前篇には臼集團構造、臼成層構造、闫社會體制の三二篇にわかれ、前篇には臼集團構造、臼成層構造、闫社會體制の三二篇においる。

### n

は、この二つの對立する理論型の組織的な清算を試みているものととする、いわゆる要素理論を排除することにある。またある意味でといつた特定のファクターによつて社會を因果法則的に説明しよう場としての相互關連性を取上げることにあり、本能とか經濟的要因場としての基本的な出發點は、社會的多元論の立場にたつ相對性の本著者の基本的な出發點は、社會的多元論の立場にたつ相對性の

にとつても、同じように重要な現代的課題の一つとみて間違ない。つの理論型の觸發という問題は、社會學のみならず全ての社會科學される階級理論が、それぞれの理論型の中心となつている。との二ついてはパースンズの理論社會學、後者についてはマルクスに代表いつてもよい。本書において部分的に取上げられるものは、前者にいつてもよい。本書において部分的に取上げられるものは、前者に

別まりを招よ、「鬼人ぶ」によって、「鬼人がなった、類別する。 関い「媒介的集團」の三つに、後者を「階級」と「階層」の二つに関い「媒介的集團」の三つに、後者を「階級」と「成層構造」の二のの大きな次元にわけ、 さらに 前者を「制度的集團」、「制度外集

規定される。 係にあり、制度依存的、中和的、沒人格的、開放的な關係にあると係にあり、制度依存的、中和的、沒人格的、開放的な關係にあるとう行動的論理に基礎を置く集團」として、目的と手段が統一的な關制度的集團は、「他人がこうするから、こういうものだからとい

和的、人格的、完結的な關係にあると規定される。じる集團」として、目的だけの意味をもつ關係にあり、自發的、親意味をもち、そのことに安堵し親しみを感じ人格的な觸れ合いを感制度外集團は、「たんに成員であり 關係當事者であること自體が

ると規定される。の關係にあり、相互利用的、獨善的、非人格的、封鎖的な關係にあた……利害や打算が極度に働く集團」として、手段だけの意味をもた……利害や打算が極度に働く集團」として、手段だけの意味をも越入的集團は、「警戒と輕蔑さえ含む非人格的相互利用を意識し

を決定する中核的部分を形づくる場合、それぞれの集團を三つの機し、それらの關係が多數者の集團においてすぐれてその集團の性格とのように、 人間關係を 機能的側面からみた 三つの關係に 類別

### 介と批評

その方法論上の動態的性格は注目されてよい。相對性の場としての視點からより動態的に把握されることになり、における形態的分類としての一律的な集團呼稱は、刻々に變動する能的集團に類別している。このような立場にたつと、從來の社會學

級」と「階層」に類別される。ている。 さらに この構造は、 全く異つた 二つの體系としての「階の場とするならば、成層は價値のやりとりの場である」と説明され次に、集團構造と區別される成層構造は「集團が行動のやりとり

規定され、人間相互の評價關係がその主軸となつている。 階層は、その逆に、價値示向を規制し價値を分有せしめる體系と關係にあり、對立、分裂の價值闘爭がその動的側面を形成する。

階級は、經濟的社會的な生產關係によつて貫かれた支配―抵抗の

によつて重大な影響を受け、微視的座標においては集團構造によつつまり具體的には、われわれは、現代階級社會における一定の位で、一方においては反撥や抵抗をおこないながら、他方においてはて、一方においては反撥や抵抗をおこないながら、他方においては、階級と階層の二つの機能的概念が必要であるといわれている。このような考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこのような考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこのような考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこのような考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこの立ちな考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこの立ちな考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこの立ちな考え方によると、階級と階層の兩者の關連性は、「そこの立ちな方によっては無関標的には、現代階級社會における一定の位置とというなどが表現していることになる。

かどうか疑問であろう。ると考えているほど、それほど新しい一つの理論構造を示しているると考えているほど、それほど新しい一つの理論構造を示しているるわけであり、兩者を「同一次元における程度と距離の問題」であて著者は、從來のミクロとマクロの説明區分をそのまま踏襲してい

ところで次の問題は、成層構造と集團構造の關係を如何に關連さところで次の問題は、成層構造と集團構造の関係を如何に関連さところで次の問題は、成層構造と集團構造の関連としてではない。しかしながらそれは、極めて一般的假説のもとに集團構造を分析することは、著者のいうように確かに一つの支點となりうるであろう。しとは、著者のいうように確かに一つの支點となりうるであろう。しとは、著者のいうように確かに一つの支點となりうるであろう。しとは、著者のいう階級と階層の相對的優位性の問題としてではない。しかしながらそれは、成層構造と集團構造の関連としてではない。とのような一般的假説のもとに集團構造を分析すること、著者のいう階級と階層の相對的優位性の問題としてであるに過ぎないと考えられる。もつとも、この二つのタイプの抽出は、そのぎないと考えられる。もつとも、この二つのタイプの抽出は、そのぎないと考えられる。もつとも、この二つのタイプの抽出は、そのぎないと考えられる。もつとも、この二つのタイプの抽出は、そのぎないと考えられる。もつとも、この二つのタイプの抽出は、そのぎないと考えられる。もつとも、この二つのタイプの抽出は、そのでない。

相反性という關係概念で把握しようとしているのである。たらない。そして具體的には、制度相互の關連を相補性、兩立性、なノルムや掟等を含む制度の束」という以外にめぼしいものはみあるものであるが、社會體制それ自體の概念規定としては、「制度的さて、社會體制とは以上の集團構造と成層構造をその構成因とす

的體制」、 或いは「上屬體制」と「下屬體制」といつた 對比概念がところで、著者の體制概念には、さらに「領域的體制」と「歷史

て現實的安定にみちびかれる、と著者は説明する。その限りにおい

あるといわねばならない。 並行させながら把握していく體系的な方法の、より組織的な展開に立場に、何ものをも附け加えたことにならないであろう。問題は、のことでは、二つの異なる次元の問題を組織的に清算しようとするのことでは、二つの異なる次元の問題を組織的に清算しようとするのことでは、二つのとの異なる次元の問題を組織的に清算しようとれだけのこれには、一つの社會體制を知るには、附加されている。それらは要するに、一つの社會體制を知るには、

察を試みたい。 「は、後篇における十例の調査研究においても、関立上、その實證研究のいる。それらの調査研究のうちには、獨立の調査報告として興味深いる。それらの調査研究のうちには、獨立の調査報告として興味深いる。それらの調査研究のうちには、獨立の調査報告として興味深いる。それらの調査研究のうちには、獨立の調査報告として興味深いる。それらの調査研究においてその理論の實證を試みては、後篇における十例の調査研究においてその理論の實證を試みている。

### Ш

しなければならない。著者は、しばしば人格主義の立場にたつと宣寶されて哲學精神とをどの程度まで明確に峻別しているか、に注目實踐的な哲學精神とをどの程度まで明確に峻別しているか、に注目實としての關係や集團、階級や階層の組合せを科學的に追求するこまとしての關係や集團、階級や階層の組合せを科學的に追求するこ實としての關係や集團、階級や階層の組合せを科學的に追求するこ實としての關係や集團、階級や階層の組合せを科學的に追求するこ實としての關係や集團、階級や階層の組合せを科學的に追求するこ實としての關係や集團、階級や階層の組合せを科學的に追求することは、著者の理論構造のうらにまず指摘しておかねばならないことは、著者の理論構造のうらに

ない限度において認められるものでなければならない。言する。人格主義は結構であるが、それは、科學的客觀性を損なわ

その點に關連して、集團構造の三分類における媒介的關係の意味 その點に関連して、集團構造の三分類における媒介的關係は人間の 放、筆者にはよく理解できない。というのは、媒介的關係は人間の が、筆者にはよく理解できない。というのは、媒介的關係は人間の が、筆者にはよく理解できない。というのは、媒介的關係は人間の が、筆者にはよく理解できない。というのは、媒介的關係は人間の が、筆者にはよく理解できない。というのは、媒介的關係の意味 れるのである。

介と批評

つていることにならないであろうか。

一つのドグマに著者自身が陷合、著者がもつとも囘避しようとした一つのドグマに著者自身が陷會(歴史的體制)の接續の問題と言つても過言ではない」という場である。しかも、現代の問題は「國民社會(領域的體制)と階級社との間に、何か次元の異つたものが介在しているように思われるのとの間に、何か次元の異つたものが介在しているように思われるの

要請される筈である。て科學的であるべき一つの理論構造に、首尾一貫した論理的體系がで科學的であるべき一つの理論構造に、首尾一貫した論理的體系が誠に人格主義の立場は結構であるが、それにはそれなりの、優れ

るのである。端的にいえば、パースンズとマルクスの二つの理論構が、その點についての著者の説明に論理的断層があるように思われが、その點についての整者の説明に論理的一貫性は、その理論にとつなるので、その一つの理論構造の論理的一貫性は、その理論にとつない。本書にみられるミクロとマクロの問題、或いは歴史的體制がある。本書にみられるミクロとマクロの問題、或いは歴史的體制がある。本書にみられるミクロとマクロの問題、或いは歴史的體制がある。本書にみられるミクロとマクロの問題、或いは歴史的體制がある。本書にみられるミクロとマクロの問題、或いは歴史的體制が、その點についての著者の説明に論理的一貫性は、その理論にとつあるのである。端的にいえば、パースンズとマルクスの二つの理論構造のたのが、本書にみられるという。本書にみられるという。本書により、本書により、本書により、本書により、本書により、本書により、の理論構造の布陣をしかねばならない宿命にひきつれた一族即黨的な理論構造の布陣をしかねばならない。本書により、本書により

られるところが多い。しかしながら、體制理論そのものの全體的構て銳い洞察の目を放つており、その點については、われわれも教え

て明確に示されていないといつてよいであろう。

それはともかくとして、本書は、個々の具體的問題の分析に極め

造を素材としながらも、兩者を乘りこえる第三の立場が首尾一貫し

次第である。(技報堂全書二〇一卷、技報堂、昭和三二年、二七五きたいと思つている。著者のバイオニヤー的な努力に敬意を表する業社會學的研究におけるこういつた新しい理論的側面に注目していな一つの方向を提起したものと考えてよい。われわれもまた、産ルな一つの方向を提起したものと考えてよい。われわれもまた、産ルな一つの方向を提起したものと考えてよい。われわれもまた、産ルな一つの方向を提起したものと考えてよい。われわれもまた、産ルな一つの方向を提起したものとはいい難のようである。(技報堂全書二〇一卷、技報堂、昭和三二年、二七五次第一位の方向である。(技報堂全書二〇一卷、技報堂、昭和三二年、二七五次第一位の方向である。(技報堂全書二〇一卷、技報堂、昭和三二年、二七五次第一位の方向である。(技報堂を書二〇一卷、技報堂、昭和三二年、二七五次第一位の方向である。(技報堂を表記)にある。

八〇

頁、定價三〇〇圓)

(十時嚴周)